

(日置郡金峰町大字浦之名字小園)

位置と環境

遺跡は、町の中心部から東に約2.5kmのところであり、金峰山の西側裾野に広がる標高約36mの河岸段丘上に立地している。約700m離れた金峰山山麓には、中世観音寺跡が所在しており本遺跡との関連性において、重要な位置を占めている。

調査の経緯

調査は、平成8年から平成11年にかけて金峰町の温泉施設造成事業に伴い、金峰町教育委員会が3次調査にわたる本調査を実施した。調査面積は、平成8年に1,400㎡、平成9年に1,400㎡、平成11年に300㎡の計3,100㎡である。

遺構と遺物

調査の結果、縄文時代早期・前期・後期・晩期、弥生時代中期・後期、古墳時代、平安時代、中世の遺物や遺構が多く発見され、複合遺跡であることが判明した。

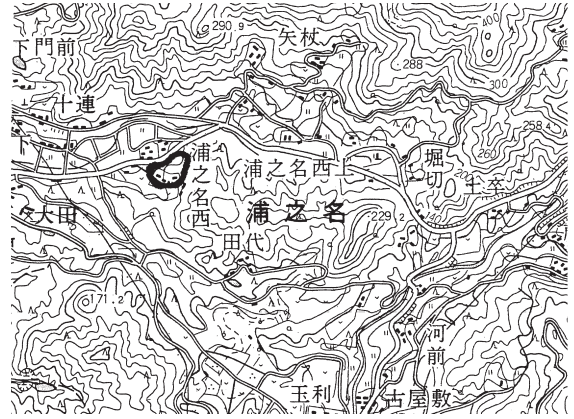
縄文時代早期の遺物は、桑ノ丸式・押型文・轟Ⅰ式土器などが出土し、同時期の集石遺構10基が検出された。縄文時代前期は曾畑式、縄文時代後期は指宿式・鳥井原式、縄文時代晩期は入佐式、黒川式、滋賀里Ⅱ式土器などが出土しており、縄文時代晩期の集石遺構5基が発見された。

弥生時代中期の遺物は、入来式・黒髪式・須玖式、弥生時代後期の松木蘭式、弥生時代終末期の中津野式土器などが出土している。また、注目すべき資料として中津野式土器と併行段階で宮崎平野からの搬入品と思われる甕が出土している。遺構は、炭化材を伴う土坑と中津野式土器の時期の竪穴遺構が検出された。

古墳時代の遺物は、東原式・辻堂原式・笹貫式などの土器が出土しており、遺構は土器溜りが2か所で確認された。

平安時代の遺物は、土師器の坏・埴・甕、須恵器の甕が出土している。遺構は、地床炉や土器と礫を埋納したピットなどが検出された。

中世では、本遺跡で最も多くの遺構や遺物が発見された。出土遺物は、中世前期の貿易陶磁器で、青磁・白磁の碗、皿に加えて青白磁など合子、皿の優品や壺、大甕、鉢、水注、盤、天目といった陶器類、



第1図 小園遺跡の位置

加えて国産陶器である常滑焼、山茶碗、畿内産瓦器碗、東播系鉢など広域流通品が含まれている。さらに南島を中心に流通が見られるカムイヤキの遺物も発見され、貿易陶磁器はもちろんのこと国内の多様な産地の商品が運ばれてきたことを示している。

そのほかに、滑石製の仏具や羽釜、土師器の坏、皿、黒色土器などが出土した。

遺構は、調査面積が制約されていたこともあり全体の様相は分からないが、掘立柱建物跡、井戸、円形竪穴遺構、石積遺構、区画溝などが検出された。遺構だけを見ると、有力者層の居館としては乏しい感じを受けるが、出土遺物は結して庶民レベルの民が保有できるものとは考えられず、背後にある観音寺と関連した施設であった可能性が高いと考えられる。

特徴

出土した遺物は、貿易陶磁器および国産陶器などその組成において特徴的な傾向を示しており、万之瀬川下流域に運ばれた商品が直接的もしくは間接的に持込まれたことを物語っているようである。背後にある観音寺や金峰山が持つ宗教的な力を介在として大きな富を得ていたのではないかと考えられる。

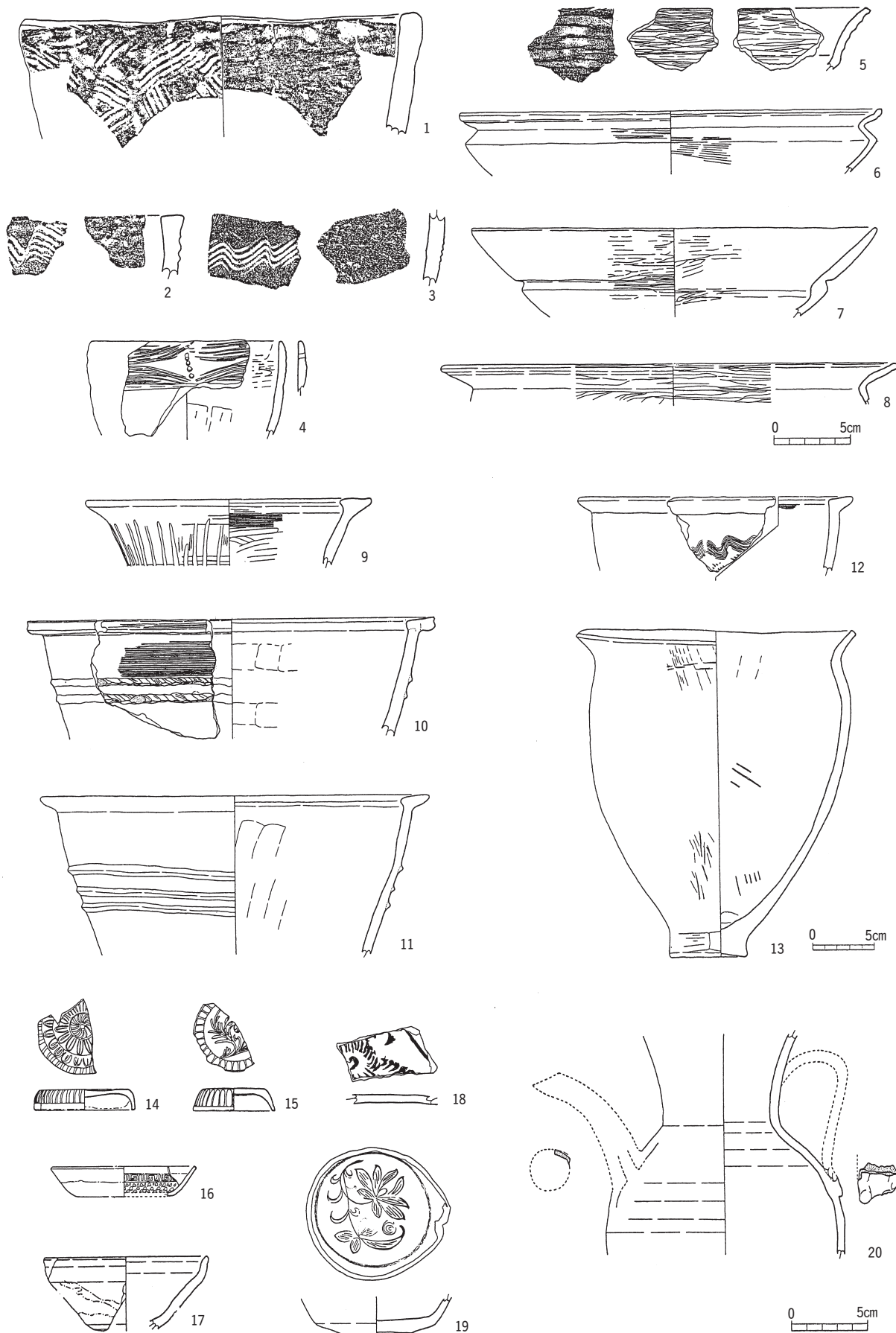
資料の所在

出土遺物は、金峰町教育委員会に保管されている。

参考文献

金峰町教育委員会2000「小園遺跡」『金峰町埋蔵文化財発掘調査報告』

(宮下貴浩)



第2図 出土遺物